

《原著論文》

# 女子大学生における化粧リスク懸念と個人的傾性との関係 ——対異性不安, セルフ・モニタリング傾向, および独自性欲求との関連を中心として——

Apprehension-about-Makeup-Risk and Personal Dispositions in Female Undergraduates :  
Heterosexual anxiety, self-monitoring, and need for uniqueness

板垣 美穂 諸井 克英\*  
(Miho ITAGAKI) (Katsuhide MOROI)

**Abstract :** The purpose of the present study was to examine the relationships between apprehension about makeup-risk and the following personal dispositions : heterosexual anxiety, self-monitoring, and need for uniqueness. Female undergraduates ( $N = 260$ ) completed the Apprehension-about-Makeup-Risk Scale (Itagaki & Moroi, 2011), the Survey of Heterosexual Interactions (Moroi, 2002), the Revised Self-Monitoring Scale (Moroi, 1997), and the Need for Uniqueness Scale (Okamoto, 1985). To examine the relationships pattern among various scale scores, the structural equation model analyses (*Amos 18.0*) were executed. The good solution was found. Exhibitionism in putting on make-up was influenced by need for uniqueness. The relationship was mediated by heterosexual anxiety in natural setting. Make-up pattern in daily life influenced the relationships between apprehension about makeup-risk and personal dispositions. The problem in this study was discussed.

**Key words :** make-up, apprehension, fashion, uniqueness, self-monitoring, heterosexual anxiety

## I. 問 題

前研究(板垣・諸井, 2011)では, 化粧リスク懸念を「化粧行動を思い浮かべた時に予想される化粧効果性に伴う懸念」と定義し, その測定を試みた。神山・高木(1987 a, b)は, Robertson (1970)が指摘した商品購買状況における知覚されたリスク概念を被服着装に伴う不安に適用し, ファッション・リスク尺度を開発した。前研究では, 化粧リスク懸念を測定するために, 神山・高木による尺度項目を修正した。女子大学生に実施し, 尺度の基本的構造の探索と他の測度との関連を検討した。主成分分析によって4主成分が抽出された。これらの主

成分は, Robertson (1970)が提起した次のリスク2側面と対応していた。①製品の性能に関係した機能的リスク(品質・性能懸念), ②製品が幸福感や自己概念を高めるかに関係した心理社会的リスク(自己顕示懸念, 化粧規範からの逸脱懸念, 流行性懸念)。さらに, これらの化粧リスク懸念4側面は, 化粧意識, 自尊心, および女性ファッション誌接触傾向との弁別的関連を見せた。

本研究では, 前研究に引き続き化粧リスク懸念に注目し, 対人関係における行動や意識に関する個人的傾性とのような関連をもつかを実証的に検討する。本研究で取りあげる個人的傾性は, ①対異性不安, ②セルフ・モニタリング傾向, および③独自性欲求である。

Havighurst (1953)は, 青年期の重要な発達課題として同年齢の異性との交際に伴う役割学習を指摘した。青年期においては, この異性との関係形成・維持が日常生

同志社女子大学大学院生活科学研究科  
生活デザイン専攻

\*同志社女子大学生活科学部

活における重要な目標となる分、異性関係形成の失敗やその懸念が不適応感をもたらすことになる。そのため、この目標がとりわけ重視されがちな米国では異性との相互作用に伴う不適応の問題が「異性不安」という概念の下で早くから研究対象とされてきた(富重, 1993 参照)。ところで、化粧行動は異性から肯定的評価を得るための自己呈示と見なすことができる。したがって、日ごろから対異性不安を抱えている者は、化粧行動を営む際には異性から効果的に評価を得ることができないという懸念をもちやすいと予想される。

**仮説Ⅰ：高い対異性不安を抱えている者は、化粧リスク懸念を喚起しやすい。**

2 番目の概念であるセルフ・モニタリング傾向は、Snyder (1979) によって提起された。Snyder は、人には自分の行動の社会的適切さに対する関心から他者の行動に敏感になり、自分の行動を統制する一連の心理学的過程が存在することを指摘し、これをセルフ・モニタリングと呼んだ。Lennox & Wolfe (1984) は、Snyder (1979) によるセルフ・モニタリング過程のうち「他者の表出行動に対する敏感さ」と「自己呈示変容能力」の2側面に限定した枠組みを提起した。

Lennox & Wolfe (1984) による2側面を化粧リスク懸念に関連づけると、次のように予測される。他者の表出行動に敏感である者は自分の化粧行動を他者がどのように評価するかに敏感であるはずであり、結果として化粧リスク懸念が高まる可能性がある。また、状況の適切さに応じた自己呈示を営む能力が高い者は、自分の化粧行動にも自信があるので、化粧リスク懸念をもたないだろう。

**仮説Ⅱ：「他者の表出行動に対する敏感さ」が高い者では化粧リスク懸念が生じやすく、「自己呈示変容能力」に富む者では化粧リスク懸念が抑制される。**

本研究で扱う最後の概念である独自性欲求とは「独自な存在でありたい」という、人がもつ基本的欲求の1つである。Snyder & Fromkin (1977) は、この独自性欲求に注目し、独自性理論を提起した。つまり、他者との間の高い類似性認知は、この独自性欲求充足を脅かすため、自他間の類似性を低減するように行動変化や認知変容が引き起こされる。独自性欲求との関連では、自己表現の手段として重要な化粧行動には、次の2側面がある。①もともと自分の中に育まれている独自の嗜好性に基づく化粧行動、②他の女性との外見的な差異化を意図した化粧行動。独自性欲求が強い者では、①の場合には

Robertson (1970) が提起した機能的リスクの側面での化粧リスク懸念が低下するが、②については他者との非類似性の確認を必要とするので、心理社会的リスクの側面でリスク懸念が高まると予測される。なお、神山・高木 (1996) は、ファッション・リスクと独自性欲求との関連を検討し、リスクの側面による弁別関係を見いだした。

**仮説Ⅲ：独自性欲求が高い者は、機能的リスクに関わる側面では化粧リスク懸念を抱きにくく、心理社会的リスク懸念を生じやすい。**

前研究(板垣・諸井, 2011)で扱った化粧リスク懸念を中心として、以上に述べた3つの仮説の検討を行うために、女子大学生を対象とする質問紙調査を行った。

## Ⅱ. 方法

### 調査対象および調査の実施

同志社女子大学での社会心理学関係の講義を利用して、質問紙調査を実施した(2011年5月30日・6月2日)。回答にあたっては匿名性を保証し、質問紙実施後に研究目的を簡潔に説明した。青年期の範囲を逸脱している者(25歳以上)を除き、後述する各尺度に完全回答した女子学生260名を分析対象とした(3回生238名、4回生22名)。回答者の平均年齢は20.35歳( $SD = .61$ , 20~23歳)であった。

### 質問紙の構成

質問紙は、回答者の基本的属性に加え、①独自性欲求尺度、②改訂セルフ・モニタリング尺度、③対異性不安尺度、④日常の化粧度に関する設問、⑤化粧リスク懸念尺度から構成されている。

#### (1) 独自性欲求尺度

回答者が抱いている「独自な存在でありたい」という基本的欲求、つまり独自性欲求を測定した。このために、Snyder & Fromkin (1977) に基づき岡本 (1985) が作成した独自性欲求尺度を利用した。岡本は Snyder & Fromkin の32項目を和訳し大学生に実施し、信頼性( $\alpha = .80$ )と再検査信頼係数(1週間間隔,  $r = .88$ )を報告した。本研究では、この32項目の表現を若干手直しして使用した(Table 1-a 参照)。回答者に「この6ヵ月間」の生活を思い浮かべさせ、各項目に表されている事柄にどの程度あてはまるかどうかを4点尺度で評定させた(「4. かなりあてはまる」~「1. ほとんどあてはまらない」)。

## (2) 改訂セルフ・モニタリング尺度

セルフ・モニタリング傾向を測定するために、Lennox & Wolfe (1984) の改訂セルフ・モニタリング尺度 (13 項目) を利用した。この尺度は、「自己呈示変容能力」と「他者の表出行動に対する敏感さ」の下位尺度から構成される。ここでは、諸井 (1997) が作成した和訳版を用いた。13 項目それぞれについて、「この 6 ヶ月間」の自分の行動や気持ちにどの程度あてはまるかどうかを 4 点尺度で回答させた (「4. かなりあてはまる」～「1. ほとんどあてはまらない」)。

## (3) 対異性不安尺度

SHI (The Survey of Heterosexual Interactions; Twentyman, Boland, & McFall, 1981) を用いて、異性との相互作用場面を含む回答者の対人不安の対処能力を測定した。本研究では、諸井 (2002) が SHI を整理・修正した 19 項目を利用した。諸井は、男女学生を対象に、「人工的な状況」、「自然な状況」、「抵抗感のある状況」の 3 主成分を抽出した。回答者に 19 個それぞれ状況を思い浮かべさせ、そのときにどのような気持ちになるかを 4 点尺度で回答させた (「4. かなり緊張する」～「1. まったく緊張しない」)。異性との相互作用に伴う不安が高いほど、高得点になるようにした。なお、諸井 (2002) では各状況に対して「どんな場合でもできるかどうか」という選択肢を用いた。

## (4) 日常の化粧度

前研究 (板垣・諸井, 2011) と同様に、回答者の日常生活での化粧行動について尋ねた。「大学に行くときの化粧」と「休みの日に遊びに行くときの化粧」それぞれに 4 点尺度で回答させた (「4. 必ず化粧をする」、「3. どちらかといえば化粧をする」、「2. どちらかといえば化粧をしない」、「1. ほとんど化粧をしない」)。

## (5) 化粧リスク懸念尺度

ここでは、板垣・諸井 (2011) が作成した化粧リスク懸念尺度をそのまま利用した。この 6 ヶ月の生活を振り返らせ、38 項目それぞれに対して、回答者自身が化粧をしたときの様子にあてはまる程度を 4 点尺度で評定させた (「4. かなり心配になる」～「1. ほとんど心配にならない」)。

なお、独自性欲求尺度 (4 頁)、対異性不安尺度 (5 頁)、および化粧リスク懸念尺度 (5 頁) では、評定順の効果を相殺するために、評定用紙をそれぞれ頁単位でランダムに並び替えた。改訂セルフ・モニタリング尺度では項目順の異なる 2 種類の評定用紙を用いた。

# Ⅲ. 結 果

## 尺度の検討

4 尺度での全項目について、平均値の偏り ( $1.5 < m < 3.5$ ) と標準偏差値 ( $SD > .60$ ) のチェックを行い、不適切な項目を除去した。その上で、以下のようにして各尺度の検討を行い、尺度項目の合計得点を項目数で割った値を尺度得点とした。もともと単次元尺度として扱われている独自性欲求尺度では、①未回転の主成分分析を行い、第 I 主成分説明率と第 I 主成分負荷量 ( $> .30$ ) をチェックした。

改訂セルフ・モニタリング尺度、対異性不安尺度、および化粧リスク懸念尺度では、主成分分析 (プロマックス回転  $k=3$ ) を実施し、主成分構造を同定した (主成分固有値  $\geq 1.00$ )。プロマックス回転後の負荷量  $|.40|$  を基準に妥当な主成分解を同定した。①特定主成分の負荷が十分に大きく ( $\geq |.40|$ )、②他主成分への負荷が小さい ( $< |.40|$ ) という基準に一致しない項目を除き再度分析を行い、明確な負荷量パターンが得られるまで、このことを反復した。各主成分への負荷量大きい ( $\geq |.40|$ ) 項目から下位尺度を構成し、信頼性分析を行った。

### (1) 独自性欲求尺度

尺度水準の検討では 32 項目すべてが適切であった。主成分分析での未回転第 I 主成分負荷量  $> .30$  を基準に分析を繰り返し、24 項目を最終項目とした (Table 1-a)。相関分析も行い、項目の同質性を確認した。 $\alpha$  係数は十分であったが、第 I 主成分説明率にはやや問題があるといえる。多次元性の検討も行ったが明確な結果が得られなかったため、本研究では 24 項目の平均値を独自性欲求得点とした。

### (2) 改訂セルフ・モニタリング尺度

尺度水準の検討で適切であった全項目を対象に主成分分析を行った。2 主成分解を求め分析を反復したところ、先行研究 (諸井, 1997) と同様な主成分が抽出された (Table 1-b)。第 I 主成分は「他者の表出行動に対する敏感さ」、第 II 主成分は「自己呈示変容能力」とそれぞれ命名された。

### (3) 対異性不安尺度

項目水準では、1 項目 (「話したことのない異性を電話でデートに誘うこと」) で不適切な結果が見られ ( $m > 3.5$ ,  $SD < .60$ )、残り 18 項目を対象とした主成分分析では固有値  $> 1.00$  の基準を満たす 2 主成分解を検討し

Table 1-a 独自性欲求尺度に関する単一次元性の検討

	相関分析 (a)	主成分 負荷量 (b)
uni_a_1 私は、知らない人ばかりのグループでも、ちゅうちょせずに自分の意見を公に述べることができる。	.40	.65
uni_a_3 私は、自分自身の考えが役に立たないかもしれないと思って、実行に移すのをためらうことがある。	* .36	.61
uni_a_5 私の場合、他の人々によって意見や考えを変えさせられてしまうことが、しばしばある。	* .26	.60
uni_a_8 私は、他の人々から生意氣だと言われることがある。	.41	.60
uni_b_1 私は、社会の規則や規範に従って暮らしていく必要は必ずしもないと、思う。	.27	.59
uni_b_2 私は、自分の気持ちを口に出すことが望ましくない結果をもたらすときには、自分の気持ちを口に出すことができない。	* .37	.57
uni_b_4 私は、自分が社会の慣習に従っていないと他の人から思われるのはいやである。	* .39	.54
uni_b_5 私は、いつも、規則を守ろうとしている。	* .41	.50
uni_b_6 私は、先輩と意見がくいちがったときには、自分の意見を言わないままにしておくことは、ふつうではない。	.51	.49
uni_b_7 私は、何かの集まりで、誤りであると思われる意見を述べている人に、反対意見を言う。	.31	.48
uni_b_8 大勢の人々の中で自分に何か違いがあると、私は不快な気持ちになる。	* .30	.48
uni_b_9 どうせ死ななければならないのなら、畳の上で平凡に死ぬよりも変わった死に方をしたい。	.27	.46
uni_c_1 私は、変わり者と言われるよりも、他の皆と同じようにしているほうがよい。	* .50	.44
uni_c_3 私は、十分に信頼できる方法を用いる人間であると思われるよりも、いつも新しいアイデアを採用する人間であると思われる。	.27	.43
uni_c_4 反対ばかりしていやな人だと思われるよりも、他の人の意見にいつも賛成しているほうがよい。	* .47	.43
uni_c_5 私は、他の人々に変わったことを言うのは好きではない。	* .50	.42
uni_c_6 私は、他の人がどのような意見を主張しようが、自分の意見を公に表明するほうである。	.56	.42
uni_c_7 私は、ふつうは、自分自身の意見を強く弁護する。	.26	.38
uni_c_8 私は、わが道を行くというやり方を好まない。	* .45	.37
uni_c_9 私は、グループの中にいるときには、争いが起こらないようにグループの人たちの考えに賛成する。	* .50	.33
uni_d_1 私は、自分より目上の人や経験の豊かな人の前では、自分の意見を言わないほうである。	* .34	.32
uni_d_3 私は、グループ活動に参加するときにはいつも、どちらかと言えばグループに同調しないほうである。	.41	.32
uni_d_4 私は、人生のいろいろな事柄で、賭けをするよりも慎重に事を運んだほうがよいと信じている。	* .39	.32
uni_d_5 人間味の乏しい社会にいつも従っているよりも、たまには規則を破るほうがよい。	.36	.31
	$\alpha = .837$	説明率 22.16%

N = 260

\* 逆転項目

(a) 当該項目得点と当該項目を除く合計得点とのピアソン相関

(b) 主成分分析における未回転第 I 主成分負荷量

Table 1-b 改訂セルフ・モニタリング尺度に関する主成分分析（プロマックス回転 (k=3)）の結果一回転後の負荷量一

	当該主成分負荷量
[他者の表出行動に対する敏感さ]	
sm_a_6 相手が冗談を聴いて笑っても、内心ではその冗談を下品であると思っているかどうかを見抜くことができる。	.77
sm_a_2 目をみれば、その人のほんとうの気持ちを正確に読み取ることができる。	.76
sm_b_4 だれかが自分にうそをついても、表情やしぐさですぐにうそだと見抜くことができる。	.73
sm_a_5 私の直感力は、相手の気持ちや行いの原因を知るのにとても役に立つ。	.69
sm_a_4 話をしているときには、相手の表情のわずかな変化にも敏感になる。	.62
sm_b_1 目をみれば、自分が相手に何か不都合なことを言ったかどうか分かる。	.53
[自己呈示変容能力]	
sm_b_6 その場面でどのようにふるまえばよいか分かれば、それに応じて、自分の行動をたやすく変えることができる。	.77
sm_b_3 自分が今いる場面で必要とされていることに応じて、自分の行動を変えることができる。	.75
sm_b_2 相手や状況に応じて自分の行動を変えるのが苦手である。	-.72
sm_d_1 まわりの人が望んでいることに応じて、自分の行動を変えることができる。	.69
sm_b_5 自分のためになると分かっている、体裁をよくするのが苦手である。	-.51
sm_a_7 物事が自分の思い通りにうまくいかないときには、すぐに他のやり方に切り換えることができる。	.42
[主成分間相関]	.33

N = 260

初期固有値 &gt; 1.783；初期説明率 46.42%

女子大学生における化粧リスク懸念と個人的傾性との関係

**Table 1-c** 対異性不安尺度に関する主成分分析（プロマックス回転（ $k=3$ ））の結果一回転後の負荷量－

	当該主成分負荷量
〔意図的な状況〕	
shi_a_2 合同コンパで、1人である見知らぬ異性に話しかけること	0.84
shi_b_3 合同コンパで、見知らぬ4人の異性のうちの1人に話しかけること	0.80
shi_a_4 ディスコで、1人でとり残されている見かけたことのある異性に話しかけること	0.75
shi_a_3 合同コンパで、2人である異性のうちの一方に話しかけること	0.73
shi_c_1 友だちから電話番号を教えてもらった異性を電話でデートに誘うこと	0.58
shi_a_1 友だちがいるまで、異性をデートに誘うこと	0.54
shi_c_2 図書館で勉強している少しだけ知り合いの異性に話しかけること	0.43
shi_b_4 喫茶店で、たまたま相席になった異性に話しかけること	0.43
shi_b_2 混み合ったバスで、連れと一緒にいる少しだけ知っている異性に話しかけること	0.41
〔自然な状況〕	
shi_e_1 学生食堂で、1人だけで座っている異性に相席を頼むこと	0.81
shi_d_3 自分のアパートの郵便受けの前で名前を書き込んでいる異性にあいさつをすること	0.79
shi_d_4 CD ショップで、以前に紹介されたが名前を忘れてしまった異性に話しかけること	0.73
shi_e_3 合同コンパで会った異性に二週後に話しかけること	0.71
shi_d_1 既知の異性と一緒に行った未知の異性が1人になったときに話しかけること	0.70
shi_d_2 パーティーに1人で来ている未知の異性に話しかけること	0.54
shi_e_2 授業後、未知の連れと歩いている既知の異性に話しかけること	0.54
shi_c_4 打ち上げコンパで、隣りに座った異性に話しかけること	0.45
〔主成分間相関〕	0.61
$N=260$ 初期固有値>1.186；初期説明率 52.30%	

**Table 1-d** 化粧リスク懸念尺度に関する主成分分析（プロマックス回転（ $k=3$ ））の結果一回転後の負荷量－

	当該主成分負荷量		当該主成分負荷量
〔Ⅰ. 自己顕示懸念〕		〔Ⅳ. 見ばえ懸念〕	
cos_ris_a_5 流行に鈍感だと思われるのではないか。	.88	cos_ris_d_3 派手すぎるのではないか。	.71
cos_ris_a_6 人から変な目でみられるのではないか。	.76	cos_ris_e_3 化粧品の質が、悪いのではないか。	.70
cos_ris_a_4 自分を引き立てることができないのではないか。	.76	cos_ris_d_4 肌触りが悪くなるのではないか。	.66
cos_ris_b_2 趣味やセンスが悪いと思われるのではないか。	.74	cos_ris_d_1 野暮ったく見えるのではないか。	.58
cos_ris_b_7 すぐ流行遅れになってしまうのではないか。	.68	cos_ris_e_6 顔つきに、合わなくなるのではないか。	.56
〔Ⅱ. 化粧規範からの逸脱懸念〕		〔Ⅴ. 流行性懸念〕	
cos_ris_c_3 化粧をしていく場所にふさわしくないのではないか。	.81	cos_ris_e_4 すぐ、あきがくるのではないか。	.78
cos_ris_c_2 化粧した後で後悔するのではないか。	.79	cos_ris_b_5 手持ちの服と組み合わせにくいのではないか。	.64
cos_ris_c_5 自分の地位や立場にふさわしくないのではないか。	.55	cos_ris_e_7 ワンパターンの化粧になるのではないか。	.60
cos_ris_b_3 慎みがないと思われるのではないか。	.51		
cos_ris_d_7 分不相応なのではないか。	.44		
cos_ris_c_4 顔立ちが悪く見えるのではないか。	.44		
cos_ris_e_1 それだけのお金をかける値打ちがないのではないか。	.43		
〔Ⅲ. 化粧くずれ懸念〕			
cos_ris_a_7 化粧くずれが、しやすいのではないか。	.89		
cos_ris_c_1 化粧くずれが、目立ちやすいのではないか。	.88		
cos_ris_b_4 汗で化粧くずれしやすいのではないか。	.86		
cos_ris_d_5 すぐに化粧直しをしないとイケないのではないか。	.65		
		Ⅱ	Ⅲ
		Ⅳ	Ⅴ
〔主成分間相関〕		I	.55
		II	.23
		III	.33
		IV	.39
$N=260$ 初期固有値>1.030；初期説明率 63.95%			

た。最終的に解釈可能で明確な主成分負荷量パターンが得られた（Table 1-c）。第Ⅰ主成分は、異性に意図的に接近する状況を表す項目の負荷が高く、「意図的な状況」と名づけた。第Ⅱ主成分に負荷が高い項目は、自然な流れでの異性への接近を意味しているので、第Ⅱ主成分は

「自然な状況」とした。

#### （4）化粧リスク懸念尺度

10項目が項目水準の検討で不適切であった（ $m \approx 1.5$ ：cos\_ris\_a\_1, cos\_ris\_b\_1, cos\_ris\_b\_6, cos\_ris\_b\_8, cos\_ris\_c\_6, cos\_ris\_c\_7, cos\_ris\_d\_2, cos\_ris\_d\_6, cos\_ris\_e\_2； $m$

Table 2 各尺度における下位尺度得点の平均値と標準偏差

	信頼性分析(a)	主成分分析(b)	平均値	標準偏差	正規性の検定(c)	尺度中性点との比較(d)
[化粧リスク懸念]						
自己顕示懸念	$\alpha = .88$	説明率 67.40%	1.86	0.78	$z = 2.48$ $p = .001$	$m < 2.5$
化粧規範からの逸脱懸念	$\alpha = .86$	説明率 54.10%	1.68	0.60	$z = 2.19$ $p = .001$	$m < 2.5$
化粧くずれ懸念	$\alpha = .88$	説明率 73.17%	2.73	0.85	$z = 2.06$ $p = .001$	$m > 2.5$
見ばえ懸念	$\alpha = .80$	説明率 55.81%	2.06	0.75	$z = 1.42$ $p = .035$	$m < 2.5$
流行性懸念	$\alpha = .68$	説明率 61.91%	1.94	0.73	$z = 1.94$ $p = .001$	$m < 2.5$
[対異性不安]						
意図的な状況	$\alpha = .87$	説明率 49.01%	3.07	0.57	$z = 1.48$ $p = .025$	$m > 2.5$
自然な状況	$\alpha = .88$	説明率 54.66%	2.82	0.65	$z = 1.13$ $p = .153$	$m > 2.5$
[セルフ・モニタリング]						
他者の表出行動に対する敏感さ	$\alpha = .78$	説明率 47.83%	2.68	0.53	$z = 1.79$ $p = .003$	$m > 2.5$
自己呈示変容能力	$\alpha = .72$	説明率 44.09%	2.81	0.45	$z = 1.93$ $p = .001$	$m > 2.5$
[独自性欲求]						
独自性欲求_単一次元	$\alpha = .84$	説明率 22.16%	2.27	0.36	$z = 1.00$ $p = .270$	$m < 2.5$

N = 260

(a) 当該項目得点と当該項目を除く合計得点とのピアソン相関(有意な正の相関値)をチェックしたうえで、Cronbach の  $\alpha$  係数算出(b) 主成分分析における未回転第 I 主成分負荷量  $> .400$  を確認したうえで、第 I 主成分の説明率算出

(c) Kolmogorov-Smirnov 検定により得点分布の正規性を検討

(d) 対応のある  $t$  検定による尺度中性点 (2.5) との比較 (すべて  $p < .001$ )

$< 1.5$ :  $\cos\_ris\_a\_2$ )。残りの 28 項目を対象に 2~5 主成分分解を検討し、最終的に 5 主成分で明確な主成分パターンが抽出できた (Table 1-d)。前研究 (板垣・諸井, 2011) を参照しながら各主成分を解釈した。第 I 主成分, 第 III 主成分, および第 V 主成分は, 前研究と同様に, それぞれ「自己顕示懸念」, 「化粧くずれ懸念」(前研究では「品質・性能懸念」), 「流行性懸念」とした。第 II 主成分は, 前研究で「自己顕示懸念」, 「化粧規範からの逸脱懸念」, および「流行性懸念」に含まれる項目に強く負荷しており, 項目全体の意味を勘案して「化粧規範からの逸脱懸念」と命名した。第 IV 主成分では, 前研究での「自己顕示懸念」, 「化粧規範からの逸脱懸念」, 「流行性懸念」に含まれている項目の負荷が高く, この主成分は構成項目全体の内容から「見ばえ懸念」と呼ぶことにした。

##### (5) 尺度得点の検討

すべての得点について, 尺度信頼性の検討, 得点分布の正規性の検討, および尺度中性点 (2.5) との比較を行った (Table 2)。尺度信頼性については全体的に十分な値が得られたが, 化粧リスク懸念の「流行性懸念」での  $\alpha$  値が .68 と少し低かった。対異性不安の「自然な状況」得点と独自性欲求得点以外で, 正規性分布からの逸脱が認められた。しかし,  $z$  値の大きさから許容範囲と判断した。また, すべての得点は尺度中性点と有意に異なっていた。

## 化粧リスク懸念におよぼす対異性不安, セルフ・モニタリング傾向, および独自性欲求の影響

### (1) 重回帰分析

「独自性欲求, セルフ・モニタリング傾向」→対異性不安→化粧リスク懸念」の影響経路を仮定し, 次の 2 通りの重回帰分析 (ステップワイズ法<投入基準  $p < .05$ ; 除去基準  $p > .05$ >) を実施した (Table 3)。(1) 対異性不安 2 得点, セルフ・モニタリング傾向 2 得点, および独自性欲求得点を説明変数とし, 化粧リスク懸念各 5 得点を従属変数とする分析 (分析 I), (2) セルフ・モニタリング傾向 2 得点および独自性欲求得点を説明変数とし, 対異性不安 2 得点をそれぞれ従属変数とする分析 (分析 II)。

分析 I によれば, 「自己顕示懸念」と「化粧くずれ懸念」のみが個人的傾性有意に影響されていた。「自然な状況」での対異性不安が「自己顕示懸念」を高め, 「独自性欲求」は 2 つの懸念を抑制した。分析 II では, セルフ・モニタリング傾向と対異性不安との弁別的関係が示された (「自己呈示変容能力→意図的な状況」, 「他者の表出行動に対する敏感さ→自然な状況」)。また, 独自性欲求は 2 つの対異性不安に対する抑制的影響を見せた。

### (2) 共分散構造分析

Amos 18.0 を用いて先に述べた因果図式の検討を行った。重回帰分析の結果に基づきモデルを作成し, 観測変数の構造方程式 (最尤推定法; 豊田, 1998) の分析を試

女子大学生における化粧リスク懸念と個人的傾性との関係

みた。修正指数を参照しながらパスの設定を変え、モデル適合度を改善し、最終モデルを得た (Fig. 1)。

重回帰分析で認められた対異性不安に対するセルフ・

**Table 3** 化粧リスク懸念の規定因に関する重回帰分析 (ステップワイズ法) の結果

標準偏回帰係数	
〔分析Ⅰ〕	
説明変数：意図的な状況，自然な状況，他者の表出行動に対する敏感さ，自己呈示変容能力，独自性欲求	
従属変数：自己顕示懸念	
自然な状況	.16 c
独自性欲求	-.14 c
	$R^2 = .06$ a
従属変数：化粧くずれ懸念	
独自性欲求	-.14 c
	$R^2 = .02$ c
〔分析Ⅱ〕	
説明変数：他者の表出行動に対する敏感さ，自己呈示変容能力，独自性欲求	
従属変数：意図的な状況	
独自性欲求	-.39 a
自己呈示変容能力	-.15 b
	$R^2 = .17$ a
従属変数：自然な状況	
独自性欲求	-.36 a
他者の表出行動に対する敏感さ	-.18 a
	$R^2 = .17$ a

$N = 260$

ステップワイズ法：投入基準  $p < .05$ ；除去基準  $p > .10$

a:  $p < .001$  b:  $p < .01$  c:  $p < .05$

モニタリング傾向の弁別的働きが，この分析では消失し，「他者の表出行動に対する敏感さ」が対異性不安 2 側面に抑制的影響を見せた。その他の経路については重回帰分析と同じ結果で有意であった。

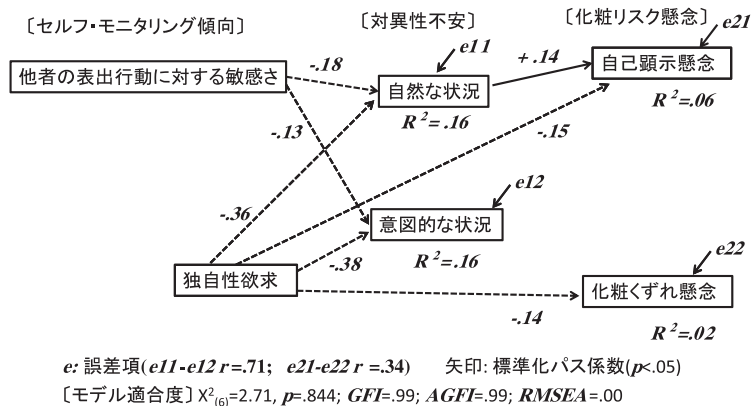
### 日常の化粧度の媒介効果

#### (1) 化粧\_一貫\_高群と化粧\_遊び\_高群の選別

「大学に行くとき」と「休みの日に遊びに行くとき」の化粧度評定の平均値はそれぞれ 3.42 ( $SD = .82$ ,  $N = 260$ ), 3.78 ( $SD = .62$ ,  $N = 260$ ) であり，尺度中性得点 (2.5) よりも有意に高かった (ともに  $p < .001$ )。また，「大学」よりも「遊び」に行くほうが化粧を行っていた ( $p < .001$ )。2 測度間のピアソン相関は高かった ( $r = .64$ ,  $p < .001$ )。回答分布を見ると，「必ず化粧する」と回答した者は，「大学」では 150 名 (57.7%) であったが，「遊び」では 223 名 (85.8%) にのぼった。そこで次のようにして 2 群を選別した。「大学」と「遊び」とともに「必ず化粧する」と回答した者 147 名を化粧\_一貫\_高群とし，「遊び」では「必ず化粧する」，「大学」では「どちらかといえば化粧する」と回答した者 66 名を化粧\_遊び\_高群とした。なお，この 2 群間で本研究で扱う諸測度の平均値に差は検出されなかった。

#### (2) 重回帰分析

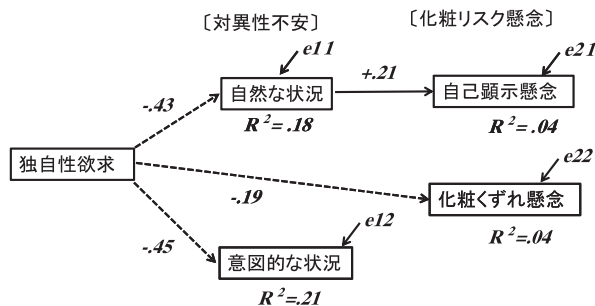
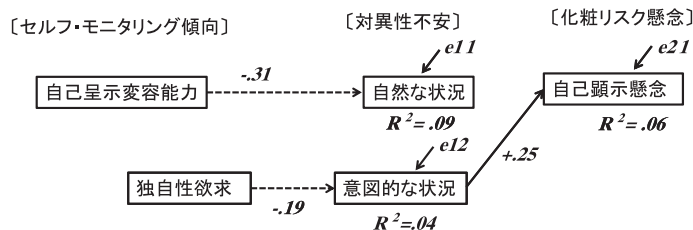
選別した 2 群ごとに，全体と同じ手順で重回帰分析を行った (Table 4)。分析Ⅰでは，両群ともに「自己顕示懸念」で有意な規定因が現れた。化粧\_一貫\_高群では対人不安の「自然な状況」，化粧\_遊び\_高群では「意図的な状況」が促進的影響を見せた。化粧\_一貫\_高群の場合には「化粧くずれ懸念」におよぼす「独自性欲求」の抑制的影響が認められた。



**Fig. 1** 化粧リスク懸念におよぼす対異性不安，セルフ・モニタリング傾向，および独自性欲求の影響：全体 ( $N = 260$ )  
— 観測変数の構造方程式 (Amos 18.0, 最尤法) による因果分析 —

**Table 4** 化粧リスク懸念の規定因に関する2群別重回帰分析(ステップワイズ法)の結果  
—化粧\_一貫\_高群と化粧\_遊び\_高群—

化粧_一貫_高群 (N=147)		化粧_遊び_高群 (N=66)	
標準偏回帰係数		標準偏回帰係数	
〔分析Ⅰ〕			
従属変数：自己顕示懸念		従属変数：自己顕示懸念	
自然な状況	.22 b R <sup>2</sup> = .05 b	意図的な状況	.26 c R <sup>2</sup> = .07 c
従属変数：化粧くずれ懸念			
独自性欲求	-.23 b R <sup>2</sup> = .05 b		
〔分析Ⅱ〕			
従属変数：意図的な状況		従属変数：意図的な状況	
独自性欲求	-.45 a R <sup>2</sup> = .21 a	独自性欲求	-.33 b R <sup>2</sup> = .11 b
従属変数：自然な状況		従属変数：自然な状況	
独自性欲求	-.43 a R <sup>2</sup> = .18 a	自己呈示変容能力	-.30 c R <sup>2</sup> = .09 c

ステップワイズ法：投入基準  $p < .05$ ；除去基準  $p > .10$ a:  $p < .001$  b:  $p < .01$  c:  $p < .05$ e: 誤差項(e11-e12  $r = .73$ ; e21-e22  $r = .33$ ) 矢印: 標準化パス係数( $p < .05$ )〔モデル適合度〕 $\chi^2_{(4)} = 5.10$ ,  $p = .277$ ;  $GFI = .99$ ;  $AGFI = .95$ ;  $RMSEA = .04$ **Fig. 2-a** 化粧リスク懸念におよぼす対異性不安, セルフ・モニタリング傾向, および独自性欲求の影響:  
化粧\_一貫\_高群 (N=147) —観測変数の構造方程式 (Amos 18.0, 最尤法) による因果分析—e: 誤差項(e11-e12  $r = .66$ ) 矢印: 標準化パス係数( $p < .05$ )〔モデル適合度〕 $\chi^2_{(6)} = 6.98$ ,  $p = .323$ ;  $GFI = .96$ ;  $AGFI = .90$ ;  $RMSEA = .05$ **Fig. 2-b** 化粧リスク懸念におよぼす対異性不安, セルフ・モニタリング傾向, および独自性欲求の影響:  
化粧\_遊び\_高群 (N=66) —観測変数の構造方程式 (Amos 18.0, 最尤法) による因果分析—



分析Ⅱによると、化粧\_一貫\_高群では、「意図的な状況」と「自然な状況」に対する「独自性欲求」の抑制的影響があった。化粧\_遊び\_高群については、「意図的な状況」に対する「独自性欲求」、「自然な状況」に対する「自己呈示能力」のそれぞれの影響が抑制的であった。

### (3) 共分散構造分析

2群ごとに、Amos 18.0を用いてサンプル全体と同じ方法で因果図式の検討を行った（Fig. 2-a, 2-b）。化粧\_一貫\_高群および化粧\_遊び\_高群それぞれで、重回帰分析と同じ経路が確認された。

## Ⅳ. 考 察

化粧リスク懸念を扱った前研究（板垣・諸井，2011）を踏まえ、本研究では、女子大学生を対象に先述した3つの仮説を中心に検討した。ここでは、観測変数の構造方程式による分析の結果に基づき考察を試みる。

対異性不安と化粧リスク懸念との間には、異性と接触することが自然である状況での対異性不安の高まりのみが自己顕示懸念を高めた。異性との接触意図が顕在化する状況での不安は化粧リスク懸念のいずれの側面とも無関係であった。したがって、仮説Ⅰは限定的に支持された。

本研究では、Snyder（1979）が提起したセルフ・モニタリング過程に関して、Lennox & Wolfe（1984）による「他者の表出行動に対する敏感さ」と「自己呈示変容能力」を取りあげた。しかしながら、これら2側面は、化粧リスク懸念に対する直接的影響がなく、仮説Ⅱは棄却された。Lennox & Wolfeによる2側面は独立的なものでなく、継時的な側面である。つまり、特定の状況でどのような化粧をすることが適切であるかが認知され、その認知に基づいて特定状況に適切な化粧が営まれる。前者には「他者の表出行動に対する敏感さ」、後者には「自己呈示変容能力」が反映される。しかし、敏感に読み取った適切な化粧を自分が行うことができないときには化粧リスク懸念が喚起され、状況に対する敏感さに欠ける場合には化粧を自在に施す能力があってもそれが適切かどうかは曖昧であるので、「自己呈示変容能力」の高さは化粧リスク懸念を喚起するかもしれない。仮説Ⅱについては、化粧をする心理・行動過程の観点から再検討すべきであろう。

独自性欲求は、化粧リスク懸念のうち「自己顕示懸念」と「化粧くずれ懸念」それぞれに負の直接的影響を示した。Robertson（1970）が提起したリスクのうち、

前者の懸念は心理社会的リスク、後者の懸念は機能的リスクに該当する。したがって、本研究の結果は仮説Ⅲを限定的に支持するといえる。

日常の化粧度に基づく分析によって、2群で化粧リスク懸念に関する異なる影響構図が得られた。化粧\_一貫\_高群では「独自性欲求→自然な状況→自己顕示懸念」、化粧\_遊び\_高群では「独自性欲求→意図的な状況→自己顕示懸念」というように、対異性不安の2側面の弁別的働きが検出された。これは、次のことを示している。場面に問わず一貫して化粧を施す者にとっては異性との自然な接触での不安喚起の有無が重要になるが、場面によって化粧を変える者には異性との意図的な接触場面のほうが顕在化する。

しかしながら、本研究における副次的知見は、次の問題を孕んでいる。「大学」と「遊び」という場面での化粧の程度の測定は大まか過ぎた可能性がある。この設問では、化粧の濃淡に言及していないので、「必ず行う」の回答には口紅など特定の部位のみの化粧行動も含まれることになる。そこで、今後は、日常の化粧行動のより緻密な測定が必要といえる。

以上に述べた本研究の知見を踏まえながら、今後も次の課題に取り組んでいくべきである。①化粧リスク懸念と個人的傾性との関連についての枠組みの精緻化とその検討、②日常の化粧行動の精密な測定。

### 〈付記〉

- (1) 本研究は、第1著者の板垣美穂（生活科学研究科生活デザイン専攻2年）が第2著者の下で修士論文研究のために収集したデータに基づいている。
- (2) 本研究の実施にあたって、同志社女子大学研究プロジェクト助成金（諸井克英・小切間美保・日下菜穂子「[からだ]の管理に関する実証的研究—こころ・からだの複合的視点と臨床」、2010～2011年度）を利用した。
- (3) データの統計的解析にあたって、IBM SPSS Statistics version 20.0.0 for Windows および Amos 18.0 を利用した。

## V. 引用文献

- Havighurst, R. J. 1953 *Human development and education*. New York: Longmans, Green & Co., Inc. 荘司雅子（監訳）1995『人間の発達課題と教育』玉川大学出版部
- 板垣美穂・諸井克英 2011 化粧リスク懸念尺度の作成と妥当性の検討、同志社女子大学生生活科学、45, 12-19.

- 神山 進・高木 修 1987 a ファッション・リスクに関する研究 (第1報) - '知覚されたファッション・リスク' の構造 - 日本衣服学会誌, **31**(1), 32-39.
- 神山 進・高木 修 1987 b ファッション・リスクに関する研究 (第2報) - ファッション・リスクの知覚に影響する個人的要因 - 日本衣服学会誌, **31**(1), 40-46.
- 神山 進・高木 修 1996 ファッション・リスクの知覚と独自性欲求 日本衣服学会誌, **39**(2), 15-26.
- Lennox, R. D., & Wolfe, R. N. 1984 Revision of the Self-Monitoring Scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 1349-1364.
- 諸井克英 1997 セルフ・モニタリングと対人不安との関係におよぼす認知欲求の効果 - 女子青年の場合 - 人文論集 (静岡大学人文学部社会学科・言語文化学科研究報告), **48**(1), 31-71.
- 諸井克英 2002 若者の対人環境管理に関する社会心理学的研究 (3) - 恋愛観におよぼす対異性 - 有能性と対異性 - 不安の影響 - 総合文化研究所紀要 (同志社女子大学), **19**, 77-92.
- 岡本浩一 1985 独自性欲求の個人差測定に関する基礎的研究 心理学研究, **56**(3), 160-166.
- Robertson, T. S. 1970 *Consumer behavior*. Scott, Foresman and Company. 河村豊次 (訳) 『消費者行動の科学』 1973 ミネルヴァ書房
- Snyder, M. 1979 Self-monitoring processes. *Advanced in Experimental Social Psychology*, **12**, 85-128.
- Snyder, C. R., & Fromkin, H. L. 1977 Abnormality as a positive characterisic: The development and validation of a scale mesuring need for uniqueness. *Journal of Abnormal Psychology*, **86**, 518-527.
- 富重健一 1993 青年期における「異性不安」研究の現状と今後の課題 東京大学教育学部紀要, **33**, 97-105.
- Twentyman, C., Boland, T., & McFall, R. M. 1981 Heterosocial avoidance in college males. *Behavior Modification*, **5**, 523-552.

(2012 年 11 月 9 日受理)